

第138回 愛知学院大学モーニングセミナー

没後100年の漱石 — いま、何が読めるのか —



南山大学人文学部日本文化学科

細谷 博

HOSOYA Hiroshi

2017年9月12日

夏目漱石 NATSUME Soseki

とはどのような作家か？

夏目漱石 (夏目金之助)

NATSUME Soseki (NATSUME Kin'nosuke)

1867慶応3/2/9 ~ 1916大正5/12/9

“明治と同じ年”

“三つの終り”

＜10年間で長編10本＞

- 1868(1歳) ① 江戸→明治
- 1893(26歳) 帝大英文科卒
- 1895(28歳) 松山中学校赴任
- 1896(29歳) 五高赴任
- 1901(34歳) ② 19C→20C
英国留学 神経衰弱 子規没
- 1903(36歳) 帰国 一高帝大講師
- 1905(38歳) 『吾輩は猫である』
- 1906(39歳) 「坊っちゃん」
「草枕」
- ▶ 1907(40歳) 朝日新聞社入社
- 1907(40歳) 1『虞美人草』
- 1908(41歳) 2『坑夫』 3『三四郎』
- 1909(42歳) 4『それから』
- 1910(43歳) 5『門』 8/24修善寺の大患
- 1911(44歳) 講演「現代日本の開化」
- 1912(45歳) 6『彼岸過迄』 ③ 明治→大正
- 1913(46歳) 7『行人』
- 1914(47歳) 8『ころも』 「私の個人主義」
- 1915(48歳) 9『道草』
- 1916(49歳) 10『明暗』 未完 12/9死去

三つの終わりと三つの始まり

- ① 1868(1歳) **江戸 Edo** → **明治 Meiji**
＜江戸の終り＞と＜明治の始まり＞
- ② 1900(33歳) **19C** イギリス留学へ
1901(34歳) **20C** 19世紀とヴィクトリア朝の終焉
＜19世紀の終り＞と＜20世紀の始まり＞
- ③ 1912(45歳) **明治 Meiji** → **大正 Taisho**
＜明治の終り＞と＜大正の始まり＞



世界の中の日本 Japan and the world

1894-1895 日清戦争 Sino-Japanese War

1904-1905 日露戦争 Russo-Japanese War

1912/7/30 明治 Meiji → 大正 Taisho

1914/04-/08 『こころ』

1914/07/28 第一次世界大戦 WWI ~1918/11/11

1914/08/23 日本参戦 Japan participates

1916/12/09 漱石没 Soseki dies

1917/03, /11 ロシア革命 Russian revolution

1918/11/11 第一次世界大戦終結

1919/06/28 ヴェルサイユ条約 1920国際連盟 League of Nations



『こころ』 *Kokoro* 1914

- 一人称の語り first-person narrative
 - ①第一部・第二部「私」=若い語り手 young “I”
 - ②第三部「私」=「先生」 second narrator “I” Sensei

 - 回顧 retrospection
 - 過去の謎 past — mystery

 - 「先生」の人間像 character of Sensei
 - 人間の孤独 loneliness
 - 隠蔽と告白 desire to hide the past & desire to confess it all

 - 「明治の精神」 “the spirit of the Meiji era”
-



『こころ』 *Kokoro* 1914

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御（ほうぎょ）になりました。そのとき私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟（ひっきょう）時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白（あから）さまに妻にそういいました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死（じゅんし）でもしたらよかろうと調戯（からか）いました。

（下五十六）

私は殉死という言葉をほとんど忘れていました。平生（へいぜい）使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談（じょうだん）を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、**明治の精神**に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

（下五十六）

私に乃木さんの死んだ理由がよく解らないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑(の)み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方ありません。あるいは箇人(こじん)のもって生れた性格の相違といった方が確かかも知れません。私は私のできる限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己れを尽したつもりです。

(下五十六)



「明治の精神」

“the spirit of the Meiji era”

▶ 旧道徳 **old morality**

▶ 近代思想 **modern thought**

個人主義 **individualism**



旧道徳

old morality

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝(じっ)と見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫(つか)みなさい。私の暗いというのは、固(もと)より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。

(下二)



その倫理上の考えは、今の若い人と大分違ったところがあるかも知れません。しかしどう間違っても、私自身のものです。間に合せて借りた損料着(そんりょうぎ)ではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思うのです。

(下二)



個人主義 individualism

「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

(上十五)

“You see, loneliness is the price we have to pay for being born in this modern age, so full of freedom, independence, and our own egotistical selves.”



講演「現代日本の開化」 1911

▶ 西洋の開化 civilization of the West

— 内発的 endogenous

内から自然に出て発展する、「花が開くようにおのずから蕾(つぼみ)が破れて花弁が外に向う」

▶ 現代日本の開化 civilization of modern Japan

— 外発的 extrinsic modernization

「外からおっかぶさった他の力でやむをえず一種の形式を取る」



そういう外発的の開化が心理的にどんな影響を吾人(ごじん)に与うかと云うとちょっと変なものになります。



- ▶ 現代日本の開化は皮相上滑(うわすべ)りの開化
superficial modernization
- ▶ 我々の開化の一部、あるいは大部分はいくら己惚(うぬぼ)れてみても上滑(うわすべ)りと評するより致し方がない。しかしそれが悪いからお止(よ)しなさいと云うのではない。事実やむをえない、涙を呑んで上滑りに滑って行かなければならないと云うのです。

Reluctantly we should modernize ourselves superficially.



『行人』 *The Wayfarer* 1913

ただ不安なのです。したがってじっとしてられないのです。兄さんは落ちついて寝てられないから起きると云います。起きると、ただ起きてられないから歩くと云います。歩くとただ歩いてられないから走(か)けると云います。すでに走け出した以上、どこまで行っても止まれないと云います。止まれないばかりなら好いが刻一刻と速力を増して行かなければならないと云います。その極端を想像すると恐ろしいと云います。冷汗が出るように恐ろしいと云います。怖くて怖くてたまらないと云います。

(塵勞三十一)

「死ぬか、気が違つか、それでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つのものしかない」

兄さんははたしてこう云い出しました。その時兄さんの顔は、むしろ絶望の谷に赴(おもむ)く人のように見えました。
(塵勞三十九)

“To die, to go mad, or to enter religion – these are the only three courses left open for me,” your brother declared at length. At that moment he looked rather like a man riding into the abyss of despair.



- 「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つのものしかない」

“To die, to go mad, or to enter religion – these are the only three courses left open for me,”

『こころ』1914 ... 死 to die

『行人』 1913 ... 狂気 to go mad

『門』 1910 ... 宗教 to enter religion...failed



漱石像の変化

The Transition of Images of Soseki

- **文豪漱石 “literary master” Soseki**
- 昭和作家達の反発
Modern writers like KAWABATA don't respect Soseki.
- **暗い漱石 “dark, pessimistic” Soseki**
- 中野重治 NAKANO Shigeharu novelist
「**漱石って奴は暗い奴だったんだ。**」(「小説の描けぬ小説家」1936/1)
- 矢崎弾 YAZAKI Dan critic
- 中村光夫 NAKAMURA Mitsuo critic
- 江藤淳 ETO Jun戦後世代 après-guerre critic




江藤淳 「現代と漱石と私」

ETO Jun *Present day, Soseki and Me*

漱石という人はおそろしく孤独な人間だったが、
漱石の作品は不思議と読者を孤独にしない。これは
どういうことだろうか、私はこのごろ思うようになった。
(冒頭)

Soseki was a terribly lonely man, but his works
don't make readers feel lonely. It's strange, what
does it mean? I began to wonder it in these days. (the
beginning)



- **文豪漱石** “literary master” Soseki
 - **暗い漱石** “dark, pessimistic” Soseki
- ↓
- **滑稽で身近な漱石** “humorous, intimate” Soseki
かつ and also,
 - **痛切な隣人漱石** “impressive neighbor” Soseki
-
- 1914 (47歳) 『**こころ**』
- ↓
- 1915 (48歳) 『**道草**』
 - 1916 (49歳) 『**明暗**』 未完 12/9死去



最後の二作の重要性

1915(48歳) 『道草』 自伝的小説

1916(49歳) 『明暗』 若いサラリーマン夫婦描く
<未完>

1916年12月9日 死去



1916(49歳) 『明暗』 未完の遺作

- ・新聞小説作家・漱石の最後の長編
 - ・身近な人間、若いサラリーマン夫婦の話
 - ・対称的(シンメトリカル)に配置された人物達
 - ・辛辣な語り→読み手の笑いを誘う
- ・凡常の人間達の駆け引きや愚行の中から、われわれの〈生〉の切実な動きとかたちが見えてくる。

重く読まれてきた『明暗』



何よりよくできた面白い小説
〈人間喜劇〉

我々自身の人間理解の力を試すことができる小説。

典型的な日本人像

Typical Images of Japanese



『坊っちゃん』 1896

伊藤整 ITO Sei:

- 日本人の諸性格の、それまでに全くの類のない把握
The molding of Typical Images of Japanese
in an incomparable way
- 主人公—楽天性、同情、無邪気さ
optimistic, a man of compassion, innocent guy
- 他の人物—日本的な薄汚さ、みみっちさ、卑劣さ、弱小さ、豪傑ぶり...完全な日本の性格



江藤淳『夏目漱石』 ETO Jun *Natsume Soseki* 1956

知識階級とはいまだに、坊っちゃん若しくは山嵐的行動をかなり真剣に憧れながら赤シャツ又は野だいの生活に余儀なくされている集団なのである。

Intellectuals are such persons who are longing seriously for honest hero, good guy, like Botchan, but are compelled to live as a dishonest, spiteful man like Red Shirt.



講演「現代日本の開化」 1911

- ▶ 日本・アジアの近代化 — 西洋化

modernization -- westnization

- ▶ 上滑(うわすべ)りの開化

superficial modernization

But we know that we can't go back to the past.

- ▶ 涙を呑(の)んで上滑りに滑って行かなければなら
ない
.....痛切さと、滑稽の同居

Soseki: Reluctantly we should modernize ourselves superficially.



痛切さと、滑稽の同居とは、

- 滑稽で身近な 漱石 “humorous, intimate” Soseki

かつ

and also,

- 痛切な隣人 漱石 “impressive neighbor” Soseki

を同時にゆたかに読み取ること。



1905(38歳) 『吾輩は猫である』

1906(39歳) 「坊っちゃん」
.....近代日本人の典型像の描出

<10年後>

1915(48歳) 『道草』
.....『猫』『坊っちゃん』執筆時の自分を
徹底して対象化

1916(49歳) 『明暗』
.....凡常の人間像
滑稽かつ切実な人間理解



『猫』や「坊っちゃん」と『道草』や『明暗』

をつなげ読むことは、

漱石その人の奥行と
漱石の文学の可能性と を

共に受けとめることへとつながるのではないか。

